

スターキャット・ケーブルネットワーク 10月1日より、デジタルコミチャン&自主データ放送を開始 デジタルメディアの利点を活かして 地域との接点を増やす



昨年懸案であった地上デジタル放送におけるコミュニティチャンネル(コミチャン)のネットワークID問題が解決し、各地でデジタルコミチャンが産声を上げている。そんな中、スターキャット・ケーブルネットワーク(株)(愛知・名古屋市)でも10月1日よりデジタルコミチャン、そして自主データ放送をスタートさせた。2つの同時スタートは非常に珍しい。そこで同社にデジタルコミチャン、データ放送を開始した狙いや、その利用システム、さらには同社の考える地域密着のあり方などについて聞いてみた。

スターキャット・ケーブルネットワーク(株) 代表取締役社長 最高業務執行責任者の加藤篤次氏

デジタルコミチャン&データ放送 開始の狙いは“接触機会の増加”

愛知県・名古屋市を中心にケーブルテレビ事業を展開するスターキャット・ケーブルネットワーク(株)(以下、スターキャット)。先進性の高い東海地域のケーブル局の中でも積極的な動きを見せる同社では、10月1日よりコミュニティチャンネル「スターキャットチャンネル」のデジタル放送を開始した。地上デジタルネットワーク上、いわゆるOFDMでの放送と、トランスモジュレーション(トラモジ)によるSTB経由での放送のサイマル放送を実施。OFDM、トラモジともにリモコン番号12チャンネルでの視聴が可能だ。

ではデジタルコミチャンを開始した理由は何だったのだろうか。スターキャット代表取締役社長最高業務執行責任者の加藤篤次氏はこう語る。

「今後も我々がこの名古屋地域でケーブル局を運営していくには、きめ細やかな地域との関わり——たとえばお客様とフェイス・トゥ・フェイスで接する機会の多さをいかに強みにするか、そして地域に根ざした状態での“情報の出し入れ”をどこまでできるかがポイントになると思います。“情報の出し入れ”と言ったのは、情報の発信だけでなく流通も含めてのことだからです。

そうした考えに基づく具体的な方策の1つがデジタルコミチャンです。デジタル化することによりデータ放送など、お客様と接する手段を増やすことができるのです。取り上げるテーマは当然お客様の生活に密着した情報であり、それを行

うことこそ、我々の使命であると感じています」。

現在全国の多くのケーブル局のエリアでは、大手通信キャリアによるFTTHサービスの営業が行われている。従来の100Mbps高速インターネットサービスに加え、VoIPによる電話サービス、そしてIPマルチキャストによる多チャンネルサービスをバンドル。トリプルプレイとして販売することで、インターネットの高速さを求めるユーザーだけでなく、より幅広い層を営業対象とすることに成功した。この結果、ケーブル局と通信キャリアは完全な競合状態となり、地域によっては熾烈な営業合戦が繰り広げられるような状況となっている。さらに今後はNGNも始まることもあり、その競争はさらに激化するだろう。

それゆえにケーブル局の強みである“地域密着”の重要性はさらに増す。競争時代を生き抜くための、それこそが唯一無二の武器になるからだ。そんなケーブル局の“地域密着”を支えるツールの1つがコミチャンであり、スターキャットはそのデジタル化によって、ツールとしてのカバー範囲をさらに広げた形になる。

だがスターキャットの事業エリアは、3大都市圏の1つである名古屋を中心とした地域。一般的に地方と比べると、どうしても都市部は住民同士の結びつきが弱く、地域コミュニティへの参加意識も低い。そのためコミチャンに対するニーズも量りづらはずだ。そこでのコミチャンデジタル化は、“地域密着”強化という点において果たして効果的と言えるのか、という疑問も出てくる。

これについて加藤社長は「都市部だからこそ、

デジタルコミチャンには大きな可能性が眠っている」と力強く言う。

「確かに都市部はコミチャンに対するニーズも掴みづらなもの。アナログコミチャンの時代も住民の皆さまのニーズを満たすべく試行錯誤を繰り返し、ある程度の手ごたえは得ましたが、その核心的な回答を得るには至っていません。しかしデジタル化によって地域住民とコミチャンの接触機会を増やすことで、ニーズを掘り起こせる可能性が高まるのです」。

もちろんコミチャンの接触機会を増加することで地域住民のニーズを掘り起こせるのは、都市部に限ったことではない。また十分にコミチャンが機能している地域の局でも、デジタル化により、新たな住民とのコミュニケーションが生まれる可能性もあるだろう。だからこそ、スターキャットはOFDMとトラモジの2方式でのデジタル化を図っている。

ケーブル局のデータ放送実施を サポートする 「DataCaster suite」

デジタル化によるコミチャンの接触機会の増加を最も顕著に表すのが、データ放送だ。スターキャットでは10月1日のデジタルコミチャン放送開始と同時に、自主データ放送もスタートさせた。この開始の背景には、加藤社長の強い意志があった。

「デジタルコミチャンならデータ放送もできるよ

うになりますが、そこで『データ放送をやるのか？やらないのか？』と議論する気は全くありませんでした。『どのくらいの帯域を確保して、どんなコンテンツをラインナップするのか。それにより他メディアとどう差別化するのか』といったことは次の段階の議論であって、デジタルの特徴であり住民との新たなコミュニケーション手段となる可能性を持つデータ放送をやらないという考えは、そもそもないだろう、ということです。ですから今は最初のステップを踏んだ段階。結婚と一緒にデータ放送を始めることがゴールではなく、あくまでスタートなのです」。

とはいえ、データ放送を開始するとすると、BMLコンテンツ制作技術やコンテンツ検証環境、さらに最も技術力が必要とされるコンテンツ帯域設計技術などが必要となる。ケーブル局単位でデータ放送を運営していくためには、相当大きなハードルを越えねばならない。

そこでスターキャットが導入したのが、NHKをはじめ、地上デジタル放送での多くの実績を持つ(株)メディアキャスト(東京・渋谷区、代表取締役 杉本孝浩)が提供するケーブルテレビ向け自主データ放送システム「DataCaster suite」だ。

「DataCaster suite」を一言で表現するならば、メディアキャストが地上デジタル放送での経験とノウハウを活かしてケーブル向けに開発したオールインワンのデータ放送システム。データ放送の運用に必要な3つの大きな要素—①外部からの情報コンテンツを受信してARIB規格準拠のフォーマットへ変換。BML画面と合成して送出設備へと送り出す「コンテンツ更新機能」②伝送知識や帯域設計を意識することなくBMLコンテンツを制作する「BML画面テンプレート制作技術」③データ放送コンテンツをデータ放送の伝送形式であるカルーセル化してTSを生成しMUX装置へと送り出す「カルーセル化とTS生成及び送出機能」を統合。その上で操作の自動化やGUIの一般化などを行うことで、データ放送に関する特別な知識がない人でも、多少の訓練でその運用ができるようになるという画期的なものだ。

機器もコンパクトな設計になっており、管理用のパソコンなどを除けば、基本的には1Uサイズのサーバー2台(コンテンツ管理系、送出系)による構成。ケーブル局で一般的に使用されているラックの1/3～1/4のスペースもあれば十分収まってしまいうコンパクトさとなっている。導入コストもケーブル局向けに設計されているので、地上波局向けのシステムと比べるとかなりリーズナブルなものとなっている。

「地上波局用のリッチなデータ放送システムしかない状況だったならば、スターキャットとしてもおそらくデータ放送をこのタイミングで始めるのは無理だったのではないのでしょうか。ケーブル局にはそれぞれに考え方と事業規模がありますが、デジタルコミチャンを始めようとお考えのほとんど局にとっては、『DataCaster suite』は十分入手可能なレベルのコストに収まっています」と加藤社長は言う。

コンテンツ供給が 技術スタッフの負担軽減

スターキャットでは07年7月末頃から自主データ放送の実現に向けて本格的に動き出した。同社の自主デジタル放送機器の構成は図1の通り。コンテンツ送出装置からアップコンバーター、ロゴ挿入装置を経て地上デジタルHD/SDセンター機へとつながり、OFDM変調機でOFDMに変調。さらに2波に分配され、1波は地上デジタルトラモジ装置で64QAMに変調され、OFDMと64QAMで送出される。

この中の地上デジタルHDセンター機につながる形で「DataCaster suite」が設置される。スターキャットの「DataCaster suite」には管理用のパソコンのほか、外部の「まちクルサーバー」から情報を受信するためにインターネットへと接続されている。

「DataCaster suite」の導入に際して大きなトラブルはなかったと語るのは、スターキャット 技

術部 保守課の吉田勝好氏。

「他社のシステムとの接続のための確認など、人的な調整といった苦労はあったが、体系的な苦労はほとんどありませんでした」。

吉田氏がデータ放送導入にあたり最も気になっていたことは、データ放送コンテンツの動作検証の方法だったのだという。通常、制作されたデータ放送コンテンツはさまざまなメーカーのSTBやテレビでの動作検証が行われる。この際、トラモジならばスターキャットが採用しているSTBだけの検証を行えばよいが、OFDMの場合はそうはいかない。加入者が自由意志で購入するさまざまなメーカーの多様なデジタル放送受信機が対象となる。これらの動作検証をすることは、手間がかかるどころの話ではない。

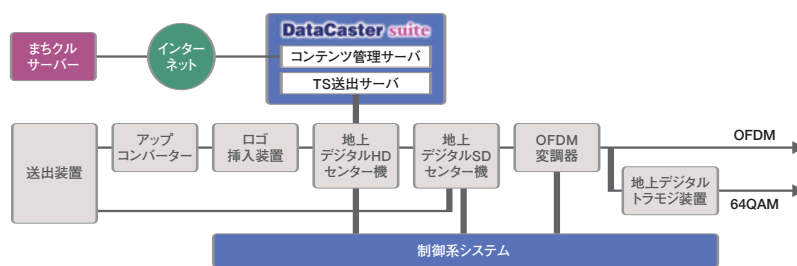
しかし「DataCaster suite」の導入によって検証の必要はなくなったのだそうだ。「DataCaster suite」では動作検証済みのBML画面テンプレートを多数用意している。ケーブル局はこのテンプレートを利用して用途に応じた番組テンプレートを作るだけでよく、STB実機による動作検証は不要となる。

「検証設備を作らなければいけないのかと頭を抱えていたので、検証済みBML画面テンプレートがシステムに搭載されていることはすごくありがたかったです。放送テストの段階でも不具合は特にありませんでしたし、現在

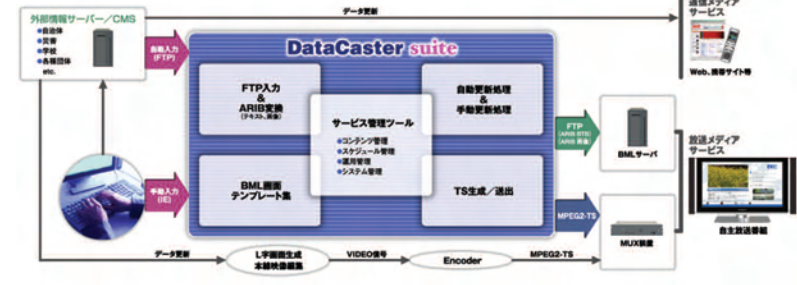


スターキャット 技術部 保守課の吉田勝好氏

■図1：スターキャット デジタルコミチャン機器構成図



■図2：「DataCaster suite」システム



も特に不具合の問い合わせはありません。管理そのものほとんど自動化されているので、手間はかかりませんね。(吉田氏)

データ放送コンテンツのテンプレート化は動作検証以外にも効果がある。コンテンツの帯域設計をテンプレート化によりある程度絞り込むことができるため、送出系の仕様を最小限のシステムに抑えることができるのだ。これにより本来は高額な送出系システムのコストカットが可能となり、それが「DataCaster suite」の手ごるなオールインワンパッケージを実現した一因となっている。

ラックに設置された「DataCaster suite」システム。中央上の黒い機器がコンテンツ管理系サーバー、その下の同型のものが送出系サーバーだ



データ放送のオペレーションに必要な人員とスキルは？

スターキャットのデータ放送コンテンツは、現在大きく分けて3つのカテゴリがある。「番組ガイド」「スターキャットからのお知らせ」、そして「まちクル@名古屋」がそれだ。

「番組ガイド」では「スターキャットチャンネル」で放送している番組の一部を紹介。レギュラー番組を9～10本、特番を毎月5～6本掲載し、随時更新している。

「スターキャットからのお知らせ」は、スターキャットが行うイベント等をお知らせするコーナー。試写会へのご招待など、プレゼント情報も並ぶ。

「番組ガイド」「スターキャットからのお知らせ」は、スターキャットのスタッフが「DataCaster suite」の入力システムを用いて手動による更新を行なっている。入力インターフェイスにはInternet Explorerを利用。普段から使い慣れているウェブブラウザを利用するので、特別な知識がなくとも誰でも簡単に入力・更新作業をすることができる。「パソコンでの文字入力ができれば、誰にでも使えるはずです」と、データ放送コンテンツの管理を行なっているスターキャット 編成制作部 編成課 武田美由紀さんは言う。

もう1つのコンテンツ「まちクル@名古屋」は、名古屋市のお店を紹介するコーナー。料理の美味しいレストランからかわいい品物を扱う雑貨店まで、面白そうな店の数々が掲載されている。この「まちクル@名古屋」はウェブ上にコンテンツを作製する地域情報入力・提供システム

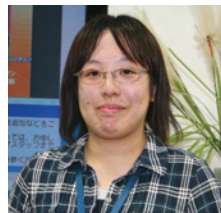
「まちクル@NAVI」と連動している。「まちクル」サーバーからインターネット経由で店舗情報を受信、それをデータ放送へと反映する形だ。「まちクル」サーバーからの情報はCSVファイルとjpg等の画像ファイルとして送られてくる。これを「DataCaster suite」で受信、自動的にARIB規格準拠のフォーマットの変換した後、「まちクル@名古屋」BML画面テンプレートへと反映する。更新も自動で行われ、普段は1日2回、昼・夜の12時に更新される。もちろん手動で任意の時間に更新を行うことも可能だ。

スターキャットではデータ放送開始前の07年7月よりウェブ上で「まちクル@名古屋」を展開していた。これをデータ放送にも活用することで、同じソースをより幅広い人へと届けることが可能となる。ワンソースをマルチユース化することで加藤社長の言う「接触機会を増やす」ことを実現しているのだ。

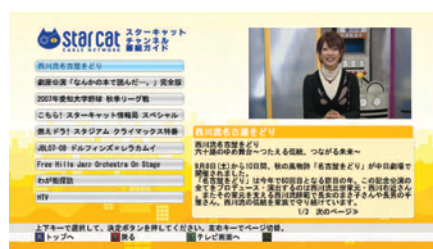
現在「まちクル@名古屋」の情報はスターキャットのスタッフが取材を行い、随時更新している。しかし「いずれはまちクル関連番組を立ち上げ、データ放送に連動させることも考えていきたい」(武田氏)とのことだ。

データ放送を運営するにあたり、スターキャットでは専任の担当者を特に設けてはいない。「データ放送のオペレーションは、入力等の更新作業を行う人員が2人。テンプレートの変更等は私が担当しています。それぞれ数時間のトレーニングを受ければ誰でもできる作業です。兼任スタッフの仕事量は増えてしまいますが、専任スタッフをおかずともオペレーションは十分できています」と武田氏は語る。

今後のデータ放送の展開について技術部の吉田氏は「ウェブサイトとの連携のためにCMSを導入し効率化を図り、地域の天気情報など、よりきめ細やかな情報を提供できるようにしたいと考えています。またケーブルの場合は上り回線が確保され



スターキャット 編成制作部 編成課の武田美由紀氏



「スターキャットチャンネル」のデータ放送画面

ていますので、ぜひ双方向サービスもやってみたいですね。加入者情報も保有しているのでも、ショッピングサービスなども比較的容易にできるようになると思います」と語る。そして「いずれは『このデータ放送すごいね』と言われるようなコンテンツを作りたいですね。そうすれば最高ですね」と笑顔を見せてくれた。

ケーブル局が媒介となり情報と人、人と人を結んでいく

デジタルコミチャン、データ放送、ウェブサイトとデジタルメディアを取り入れ、ワンソースマルチユース化によって住民とより多くの接触機会を持つと工夫を重ねているスターキャット。しかしそれだけでは「地域密着」にはならないと、加藤社長は考えている。

「ワンソースマルチユース化でコンテンツをさまざまなメディアで見せていく中で、当然問われるのは情報の質と量です。特に本格的な競争時代を迎える中で、コンテンツの質はきちんと考えていかなければいけません。キーワードとしては『バーチャルリアリティ』『オープンとクローズド』が挙げられます。

デジタルメディアやインターネットの発達で、バーチャル的に距離と時間を越えられる時代になりました。だからこそもっとリアルな関係を築くことが求められていると思いますし、私たちがリアルなつながりを大事にしてきました。『テレビが映らなくなった』という問い合わせがあれば、直接うかがって対応する。地域の住民と直接つながっていくことこそ、「地域密着」です。スターキャットでは、どんな小さな問い合わせでもスタッフができるだけうかがって対応する体制を取っています。

つないでいくのは、我々と住民の皆さまだけではありません。現在はネットを中心に、誰もが参加できる非常にオープンなコミュニケーションの場が広がっています。そんな中だからこそ、逆に地域に特化したクローズドなコミュニケーションの場も求められています。たとえばそれは退職後の人生を過ごす高齢者に対し社会参加へのヒントを与えるようなコミュニティであったり、地域の人々と熱く語り合えるような場であったり、いろいろな形がありますが、そのような「顔の見える環境」で人々をつないでいくことも必要になってきます。お客様は「加入者」というよりも、この場合はサークルの“会員”といったほうがイメージは近いかもしれません。私たちケーブルテレビは、そのような交流の場を提供する

ことが求められていると思います」。

さまざまなメディアとコンテンツを使って“情報”と“人”を結ぶ。そして自らが媒介となって

“人”と“地域”、“人”と“人”を結ぶ。スターキャットの目指す“地域密着”の形は、全国のケーブル局の目指す姿の1つといえるだろう。競争

時代の厳しい荒波の中、その理想郷へたどり着くことができるのか。今後のスターキャットの航路、そして加藤社長の舵取りに注目したい。

ケーブル局の地域情報収集を支援する「まちクル@NAVI」

地域情報入力・提供システム「まちクル@NAVI」は、簡単な入力操作によりお店の情報をサーバーにアップ、そこから多数のメディアへと情報を送出することができる、いわば地域の店舗やイベント情報に特化したCMSの機能を有したものである。

このシステムはケーブル局向けに開発されており、ケーブル局が自局のウェブサイト内に地域情報ポータルを容易に開設することが可能。情報の入力はブログ等と同じなのでパソコンを使える人なら誰でも簡単に行える。また300以上の業種に対応するテンプレートが用意されており、お店や施設の位置（緯度経

度データ）を地図上に簡単に登録出来るほか「クーポン」の作成や「イベント情報」をメールで案内する仕組みなど、お店から求められる販促機能も用意されている。「まちクル」に登録された情報は「情報カプセル」と呼ばれる形式で保存され、さまざまなメディアに情報を表示することが可能となる。

「まちクル」のサーバーにアップされた情報は、パソコン、携帯電話向けにはウェブ上のサイトへ、データ放送には「DataCaster suite」を経由し地域情報画面へと自動的に配信される。また07年10月からはG-BOOK対応の通信機能付きカーナビへの表示も可能とな

った。

この「まちクル@NAVI」の仕組みはトヨタ自動車の事業開発部が地元のケーブルテレビ局向けに開発し、現在ひまわりネットワーク（株）（愛知県・豊田市）とスターキャットで利用されている。当面東海地区のみで限定的に運用しているが、ニーズが強ければサービスの拡大も検討するという。

■「まちクル@NAVI」お問い合わせ先

トヨタ自動車（株）事業開発部

TEL:052-552-0441

E-mail: av-tmcmachikuru@mail.toyota.co.jp

スターキャットの自主デジタル放送設備全体を構築

～DataCasterによるコンテンツ制作案の提案から送出までトータル提供～



柿沢裕治氏（株）ブロードネットマックス 機器システム本部 デジタル技術部 部長付

私は地上波局のデータ放送構築を7年間担当してきましたが、地上波局のデータ放送は設備も大規模で、BMLを使うためコンテンツ制作も難しい部分があります。全国のケーブルテレビ局と勉強会をかねたデータ放送のご提案を行なっていますが、このイメージの影響からか、数カ月前までは、多くのケーブル局がデータ放送への取り組みに躊躇しているようでした。しかし、メディアキャストの「DataCaster suite」によって、この高いハードルのイメージは払拭されつ

つあります。実際、地上波のデータ放送にお

ける知識の5%の知識量で運用できますし、一人でいくつもの仕事をこなすケーブル局スタッフにも日頃の業務の負担が少ない設計になっていると思います。

2011年にはアナログ放送が終了し、その時点にはデータ放送がマストなサービスになります。ケーブル局のデータ放送がビジネスとして成立するのも2011年以降といえるでしょう。ならば、現時点からデータ放送に着手し、コミュニティチャンネルにおけるひとつのツールとして、ノウハウを蓄積していくことがよいと思います。当然、このような認識は全国に広がり、今年度末、来年度中には多くのケーブル局がサービス開始を予定していると聞いて

います。

地上波のデータ放送メニューはどうしても画一化されてしまいます。しかし、地域密着のケーブルテレビのデータ放送ならば、自治体情報、道路工事情報、総合病院の夜間診療担当医情報、ゴミだしカレンダーなどなど、地上波が提供できない面白いコンテンツがアイデアひとつでたくさん誕生します。データ放送こそ、ケーブル局に優れたサービスだと思っています。

私たちブロードネットマックスもSI事業者として、コンテンツ制作の提案から送出までトータルでさまざまなものを提供していきたいと考えています。

スターキャット・ケーブルネットワーク（株）

〒460-0003 愛知県名古屋市中区錦1-16-7 NORE伏見ビル
TEL.052-231-2310

<http://www.starcats.co.jp>



【お問い合わせ先】

（株）メディアキャスト

〒150-0044 東京都渋谷区円山町5-3 玉川屋ビル5F
TEL.03-5728-4663

<http://www.mcast.co.jp/>
info@mcast.co.jp

MEDIACAST
for DataBroadcasting